皆様、おはようございます。
先日、朝の番組で、先週の水曜日の情報だったでしょうか、庄原市が全国一の寒暖差があったように紹介しておりまして、びっくりいたしました。庄原も広いですので、一番朝晩の冷えるところの統計課とは思いますが、最高気温が２７．５℃、最低気温が５．１℃で、寒暖差は２２．４℃とのことでした。一日の温度差が２２℃とは、一日で真冬と真夏を経験するようなものですね。私たちの身体も、一生懸命調整をしていることと思いますが、疲れやすいこの時期、ぜひご自愛ください。
夜に気温が下がり、寒暖の差があるとお米やリンゴなど作物に甘みが増えるのだそうですね。西城町のすずらんの湯の所にマラソン選手が滞在して、標高の高い所で高地トレーニングをする方々も見かけます。そうしますと、私たちは普段から、厳しい環境にさらされながらも、身体の各機能をフルに鍛え上げながら、平地に住む方々に比べ、居ながらにトレーニングが出来ていて、頑強な身体が出来上がるのだと考えたいと、前向きに考えたいと思います。
また今日は、母の日です。それぞれのご家庭の中で、信仰熱心なお母さま方が、祈り、仕え、主の祝福をご家庭にもたらして下さっておられる、尊いお働きに感謝し、教会でのお働きとご奉仕に感謝し、全ての女性の皆様に特に感謝を申し述べたいと思います。いつもありがとうございます。

さて、イースターの日以来、私たちは主の復活の喜びと感謝の思いをかみしめてまいりました。しかし私たちのとっての喜びの朝は、弟子たちにとっては混乱の朝であり、途方に暮れる、理解しがたい朝であったことを聖書から読み進めてまいりました。

ペンテコステを再来週に控え、もう一度、マタイ福音書２８章から怯える弟子たちを励まされた主の御言葉を味わいたく願います。

1 さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。
2 すると、大きな地震が起った。それは主の使が天から下って、そこにきて石をわきへころがし、その上にすわったからである。

主の復活の朝。大地震が起こりました。それは主の使いが天から降って、主の墓の所に来て石を脇に転がして、その上に座ったからです。神様は御使いを送られ、大地震と共にご自分の御心を成し遂げられます。この世界は主のものであり、主によって造られ、主がすべてを司っておられます。主には出来ないことは何一つありません。

3 その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。

4 見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。

他を威圧するような兵隊たち。彼らはその威厳をもって、命を懸けてこの墓の守りをしていました。

マタイ 27:62 あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、
27:63 「長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。
27:64 ですから、三日目まで墓の番をするように、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み出し、『イエスは死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふらすかも知れません。そうなると、みんなが前よりも、もっとひどくだまされることになりましょう」。
27:65 ピラトは彼らに言った、「番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい」。
27:66 そこで、彼らは行って石に封印をし、番人を置いて墓の番をさせた。

イエス様の遺体は安息日が始まろうとしている日没のぎりぎりの所で墓に収められました。その墓に対して、祭司長、パリサイ人たちは、弟子たちがイエス様の遺体を盗み出して、かねてからイエス様が三日目に復活すると語っていたことが成就したと吹聴しないようにと、ピラトに墓の番人をつけるようにと願いました。墓に収められた出来事を見守り、それからピラトのもとに行って願い出ているうちに安息日に入ってしまったのではないかという疑念が沸いてきます。しかし彼らはなりふり構わず、画策をしていたことが分かります。

3 その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。
4 見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。

その屈強な、ピラトが配置したローマの番兵たちが、稲妻のように輝く主の御使い、その衣は雪のように白く輝く、その御使いの姿を見た途端、屈強な兵士たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のように倒れたのです。
恐るべき主の御業をここに見ます。
主は人のあらゆる企ても画策も無に帰されます。主の勢いに人間は少しも抵抗することは出来ません。
屈強な兵士たちも、主が遣わされた使いを前にしては、赤子のように何の力もなく、百洗礼間の兵士たちは、目の前に現れた経験したこともないような状況に、なすすべもなく、恐れおののき気を失いました。私たちにとっても、墓に入るような、人生にあたっては最果ての

終点のようなところに入れられて、絶望の中、もう挽回のチャンスはなく、屈強な敵に取り囲まれようとも、人生万事休すの時にあろうとも、神様には出来ないことはありません。
私たちを取り囲む難敵が、勢力が、死の力が、恐れのあまり震えあがって死人のようになり、倒れるということを私たちは知っています。私たちは何を本当に畏れるべきかを教えられます。

5 この御使は女たちにむかって言った、「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、
6 もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんなさい。
7 そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたがたに、これだけ言っておく」。

主を畏れる時、私たちの心の恐れは取り除かれます。
主は死よりよみがえられました。
「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、もうここにはおられない。」
主は墓の中にはおられません。どうして私たちもまた、時に生きているお方を死人の内に、墓の中に探そうとするのでしょうか。
復活して、今も生きておられるから、恐れることはない。心配することも、寂しがることもない。恐れるな、と主は語られます。

8 そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。

「恐れながらも大喜びで」という表現は面白いですね。恐れるなと言われても、まだまだすべての恐れを払しょくできるわけでもない。しかし主は、大きな喜びをも心に宿してくださいました。そのことによって、恐れは恐れではなくなります。恐れにばかり目を奪われていた私たちが、ついにそこから解き放たれようとしていました。

9 すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。

「平安あれ」、これは「喜べ」と訳してもいい言葉です。復活の主と出会い、弟子たちは喜んでイエス様に近寄り、その足元にひれ伏し、愛するイエス様の御足を抱いて感激の内に礼

拝を捧げました。

私たちの歩みもまた、主のお執り成しのおかげで、恐れながらも大喜びで、主に委ね進めるようになりました。私たちの罪を贖い十字架に死なれ、復活された主が、私たちの前にいつもおられ、私たちはその御足にすがって祈り礼拝し、生きることが出来ます。

10 そのとき、イエスは彼らに言われた、「恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい」。

もう一度主は恐れるなと語られます。私たちがどんなに畏れにいつも取り囲まれ、信頼も、喜びも奪い取られて恐れの中に投げ入れられているかに気付きます。私たちは先の事ばかり気にして、どうすることも出来ないのに心配して、悪い方ばかりに考え、それでいて、今日成すべきことに対しては無頓着です。

詩編
都もうでの歌
126:1 主がシオンの繁栄を回復されたとき、われらは夢みる者のようであった。
126:2 その時われらの口は笑いで満たされ、われらの舌は喜びの声で満たされた。その時「主は彼らのために大いなる事をなされた」と／言った者が、もろもろの国民の中にあった。
126:3 主はわれらのために大いなる事をなされたので、われらは喜んだ。
126:4 主よ、どうか、われらの繁栄を、ネゲブの川のように回復してください。
126:5 涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る。
126:6 種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。

詩編 30:1 主よ、わたしはあなたをあがめます。あなたはわたしを引きあげ、敵がわたしの事によって喜ぶのを、ゆるされなかったからです。
30:2 わが神、主よ、わたしがあなたにむかって助けを叫び求めると、あなたはわたしをいやしてくださいました。
30:3 主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、墓に下る者のうちから、わたしを生き返らせてくださいました。
30:4 主の聖徒よ、主をほめうたい、その聖なるみ名に感謝せよ。
30:5 その怒りはただつかのまで、その恵みはいのちのかぎり長いからである。夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る。
30:6 わたしは安らかな時に言った、「わたしは決して動かされることはない」と。

11 女たちが行っている間に、番人のうちのある人々が都に帰って、いっさいの出来事を祭司長たちに話した。
12 祭司長たちは長老たちと集まって協議をこらし、兵卒たちにたくさんの金を与えて言った、
13 「『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え。
14 万一このことが総督の耳にはいっても、われわれが総督に説いて、あなたがたに迷惑が掛からないようにしよう」。
15 そこで、彼らは金を受け取って、教えられたとおりにした。そしてこの話は、今日に至るまでユダヤ人の間にひろまっている。

使徒 16:27 獄吏は目をさまし、獄の戸が開いてしまっているのを見て、囚人たちが逃げ出したものと思い、つるぎを抜いて自殺しかけた。

このところにありますように、何かのために番をする者は、時に命懸けで、ちょうど使徒１６章にありましたように、囚人に逃げられたならば、自分の命と引き換えにするように、番をする者には責任が問われたというのに、「弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ」と言えというのは、何ともお門違いです。寝ていて盗まれたなどと、そんなことになったらどんなにか自分たちの責任が責められるというのでしょうか。
しかし彼らは真実を捻じ曲げたことで、口封じのお金をもらい、さらに総督から咎めがないようにと裏工作をしてもらうことになりました。しかしそのように裏工作をしなければ、到底番兵が気を失って倒れるということなどは、あり得ないことでした。
「寝ているうちに盗まれた」という苦しい言い訳を言い広め、それが今日まで伝わっています。しかし真実はそれとは異なります。主の真実は、どんなにか人がそれを捻じ曲げようとしても、決して成功することがありません。

そのような陰謀と策略、黒いものを白と言わせるようなねじ曲がった世の中で、弟子たちは怯え、恐れていました。しかし主は御使いを送り、敵を震え上がらせ、復活の、生けるイエス様の姿を現し、神様はその策略を無きものにされました。
そして恐れの中にある弟子たちを喜びに満たし、「喜べ」と語られます。
そして、主は弟子たちに命令を言い送られます。

16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエスが彼らに行くように命じられた山に登った。
17 そして、イエスに会って拝した。しかし、疑う者もいた。
18 イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。

「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」

イザヤ 41:8 しかし、わがしもべイスラエルよ、わたしの選んだヤコブ、わが友アブラハムの子孫よ、
41:9 わたしは地の果から、あなたを連れてき、地のすみずみから、あなたを召して、あなたに言った、「あなたは、わたしのしもべ、わたしは、あなたを選んで捨てなかった」と。
41:10 恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる。

「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。」義とされ復活されたイエス様は、わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられました。それゆえ、私たちはどんなときにも動ずることなく、策略と謀略の中も、危険と恐れの中にあっても信仰が薄く、疑いの中にあっても喜んで進むことが出来ます。

19 それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、
20 あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。

出て行って、弟子として、バプテスマを施し、教えなさい。恐れるな、信じて、喜んでいなさい。すべての権威はわがもの。それゆえ、すべての国民をわが弟子としなさい。私があなたがたに命じたこと一切を守るように教えなさい。
行って、弟子とし、洗礼を授け、教えなさい。
行って、弟子とし、洗礼を授け、教えなさい。
私たちは、「世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」とおっしゃって下さる主と共に、どんなときにも恐れにさいなまれず、世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるとおっしゃる主と共に、喜びを頂いて、行って、弟子とし、洗礼を授け、教えることが出来ますように。今週も恐れを取り除かれ、喜びと共に進む私たちの背中を主に押していただき、行って、弟子とし、洗礼を授け、教えることが出来ますようにと心から願います。

ヘブル 10:35 だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。

10:36 神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。
10:37 「もうしばらくすれば、／きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。
10:38 わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、／わたしのたましいはこれを喜ばない」。
10:39 しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。

◇今日の説教のまとめ
主の復活の日以来、ずっとその出来事を読み、弟子たちの姿を見てまいりました。主の復活の出来事の確かさ、その予告の御言葉の実現の確かさをひしひしと感じました。それに比べて右往左往としておろおろとする弟子たちの姿もはっきりと見えました。恐れ、不安を抱き、途方に暮れ、疑い、信じない姿がありました。
ふとこう思うのです。私たちは主を信じるか、目に見える状況を見て、私たち自身の恐れを信じるかの二択をいつも迫られているのだと。
イエス様は恐れるなと語られ、信じなさい、喜びなさいといつも私たちに語り掛けられます。一方で暗闇の力は絶望を吹き込み不安を煽り立てます。
恐れるべきは主のお力です。目に見える、私たちを取り巻くべき状況ではありません。
番兵たちは、自分の命と引き換えに守るべきものを守っていました。(使徒 16 章の獄吏を参照)　本来居眠りをしていて死体を盗まれたなどと言ったら厳罰に処されることでしょう。しかしそのような苦しい言い訳をしなければ説明出来ない異常事態が起こったのです。稲妻のように輝く主の御使いが、重い墓石をいともたやすく転がし、屈強な番兵は赤子のようになすすべがありませんでした。
こういうことをお出来になる方を畏れ、思いを向けるべきであり、私たちの心の思いなど、いかに恐るべきことがあるでしょうか。
世の終わりまでいつも共におられる主の定めを愛し、守り行いたく願います。

◇祈祷；**天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。**

私たちはいつもいつも、目先の状況に心捕らわれ、先々のことを悪い方にばかり考えて不安になったり絶望したりするものです。神様という力強い守り手がいながら、容易に信仰を失い、疑いの心を持ち、落胆す

る、まことに信仰に薄い者でありますことをお赦し下さい。そのような私たちに、「恐れるな、喜べ、わたしは天と地の一切の権能を授かっている。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と語り掛けて下さり、ありがとうございます。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン